

安然における『密嚴經』

北 尾 隆 心

安然の代表作として重要とされる『教時義』（大正七五）と『菩提心義抄』（大正七五）との二つの著作の中には『密嚴經』（大正一六）が引用されているのである。この『密嚴經』には漢訳として日照訳と不空訳とが存するのであるが、『教時義』においては日照訳のみが引用されているのである。

『教時義』には『密嚴經』の引用が六箇所あり、その内の二箇所（三七五c・三七六b）は金指環の喩（日照訳七四七a、不空訳七七六a）を引いているのであり、この喩は両訳共に同じであってどちらの訳か区別できないが、他の四箇所より明らかに日照訳のものであることが分かるのである。

第一は「密嚴經云。心有^{日照訳にはない}八種。或復有^{日照訳にはない}九。与^{日照訳にはない}無明俱為^{日照訳にはない}世間因。世間悉是心心法現。雖^{日照訳にはない}是心心法及以^{日照訳にはない}諸根生滅流轉為^{日照訳にはない}無明等之所變異。其根本心堅固不動。」（三七五a）であり、これは日照訳（七三四a）と一致するのであり、それに対して不空訳は偈頌で「八種九種心 常与^{日照訳にはない}無明^{日照訳にはない}轉 能生^{日照訳にはない}諸世間」皆心心法現 由^{日照訳にはない}彼流轉故 諸識与^{日照訳にはない}諸根^{日照訳にはない} 無明所^{日照訳にはない}

變異^{日照訳にはない} 本心堅不動」（七五九c—七六〇a）とあって全く違ふのである。第二は「密嚴經云。涅槃若滅壞衆生有^{日照訳にはない}終尽。衆生若有^{日照訳にはない}終是亦有^{日照訳にはない}初際。應^{日照訳にはない}有^{日照訳にはない}非^{日照訳にはない}生法而始作^{日照訳にはない}衆生。無^{日照訳にはない}有^{日照訳にはない}非^{日照訳にはない}衆生而生^{日照訳にはない}衆生界。」（三七六b）というところであり、これも日照訳（七二七c）と一致しているのであり、不空訳（七五二b）ではこの部分の「衆生」が「有情」となっており異なることが分かるのである。第三は「密嚴經云。密嚴土中人一切皆同^{日照訳にはない}無^{日照訳にはない}有^{日照訳にはない}剎那壞。」（三八八a）であるが、これに対応する日照訳は「密嚴中之人 一切同^{日照訳にはない}於^{日照訳にはない}仏^{日照訳にはない}超^{日照訳にはない}過剎那壞。」（七二五b）であり、不空訳では「密嚴中之人 一切同^{日照訳にはない}仏相^{日照訳にはない}超^{日照訳にはない}越剎那壞」とあるのであり、日照訳では「仏」とあるところが不空訳では「仏相」となっているのであってこのことよりこの引用が日照訳の取意文であることが分かるのである。そして、第四は「密嚴經云。密嚴仏土是大智慧是大寂靜」（四二七c）であり、この部分に相当する日照訳は「密嚴仏土是最寂靜是大涅槃。是妙解脫是淨法界。亦是智慧」（七三四c）

とあり、不空訳では偈頌で「密嚴微妙土 是最勝寂靜 亦是
大涅槃 解脫淨法界 亦是妙智境」(七六一a)とあって、「密
嚴仏土」という語等よりこの引用が日照訳の取意文であるこ
とが分かるのである。

以上の四箇所より安然の『教時義』における『密嚴經』の
引用がすべて日照訳であったことが分かるのである。

そして、このことより『教時義』の成立期には安然は不空
訳の『密嚴經』を見ておられなかったのではないかという仮
定が成立するのである。この仮定は前述の如くに引用におい
て不空訳の『密嚴經』を使われていないことによるのである
が、特に前述の第三において不空訳が使われていないことが
大きな根拠となるのである。というのは、安然は『教時義』
において最澄の『守護国界章』(大正七四)を度々引いてお
られるのであるが、この『守護国界章』において最澄は「飢
食者会_レ密嚴經文_二云。密嚴土人有_二一性。二相。此会积
者。專違_二經旨。飢食者未_レ見_二新經。有_二此妄会。新經文云。

密嚴土之人。一切同_二仏想。超_二越刹那壞。既云_二仏相。豈作_二
性相会_二哉。此經正文。如_二日照闇。更不_レ可_レ疑。』(二二四a)
と述べているのであり、①③より最澄が日照訳より不空訳
(新經)を正文とし、天台宗として選択されたことが分かる
のであり、また、この部分で最澄が問題としている『密嚴
經』の文は②からも分かる如く前述の第三の引用部分と同じ

ところであるからである。故にこのことからもし安然が不
空訳を見ておられたならば不空訳を使われたであろうし、ま
た、使われないならばそれなりの理由を示めされるものと思
われるのであるが、現実には日照訳が使われているのである
り、それについての理由についても一切述べられていないの
である。故に安然は『教時義』作成当時は不空訳を全く見て
いなかったものと思われるのである。

これに対して『菩提心義抄』ではどうかと云うと、この書
には『密嚴經』の引用が四箇所存するのであり、その内の二
箇所(五三〇a・五三八b)は前述の金指環の喩であってどち
らの訳が決することはできないが、後の二つの内の一つ(四
八〇b)は前述の『教時義』の第四の引用と同じであって日
照訳であることが分かるのである。そして、もう一つは「若
密嚴經云。心性本清淨不_レ可_レ得_二思議。是如來妙藏。如_二金處_二
於礦。意生_レ從_二藏識。余六亦復然。識六種。或多差別。於_二
三界賴耶一与_二諸熏及余心法等染淨諸種子雖_二同住無_レ染。仏
種性亦然。定非定常淨。如_二海水非_二常住波潮而轉移_上。賴耶
亦復然。隨_二諸地差別一修有_二下中上捨_レ染而明顯云。』(五四〇
a)であり、この部分に相当する日照訳は「心性本淨不可思
議。是諸如來微妙之藏如_二金在_二礦。意從_レ心生余六亦然。如_レ
是多種於_二世法中一而為_二差別。仁主。阿賴耶識。雖_レ与_二能熏
及諸心法。乃至一切染淨種子一而同止住性恒明潔。如來種姓

応_レ知亦然。定不定別体常清淨。如_二海常住波潮転移。阿頼耶識亦復如是。諸地漸修_二下中上別。捨_二諸雜染而得_一明現_二」(七二七b)とあり、明らかに相違することが分かるのである。そして、この部分は完全に不空訳(七五二a)と一致するのであり、『菩提心義抄』においては不空訳の引用があることが分かるのである。このように『菩提心義抄』においては日照訳と不空訳との両訳が使われていることが分かるのであり、それは「具如_二上文及真言宗教時義中_一」(五五九b)とある如くこの書は『教時義』を前提として造られているからであり、それ故に『教時義』において引用した部分と同じところは日照訳を使い、新たな引用には不空訳が使われたものと思われるのである。故に安然是『菩提心義抄』の頃には両訳を見ておられたことがはっきりとしているのである。

また、前述の「具如_二上文及真言宗教時義中_一」(五五九b)というところより『教時義』が『菩提心義抄』より以前に造られたことははっきりとしているのであり、つまり、『菩提心義抄』に「于_レ時仁和元年十一月二十日略抄畢焉」(四五二a)、「仁和元年十一月二十一日略抄畢」(五五六c)とある如くこの書の製作年代である仁和元年(八八五)十一月二十日頃よりも以前に『教時義』は造られたのである。

そして、このことは『密厳経』を通して見るとより明確になるのであり、『教時義』の撰述年代を知る一つの手懸を与

えてくれるのである。その手懸とは、前述の如く『菩提心義抄』では両訳の『密厳経』を見ているが、『教時義』では日照訳のみで全く不空訳を見ていないということである。つまり、『教時義』は安然が不空訳の『密厳経』を見る以前に撰述されたと思われるということである。

そのようにして見ると元慶九年(八八五)正月二八日に編集され、仁和元年三月三日に改修された安然の『八家秘録』(大正五五)には「新訳密厳経三卷 内云大乘密厳経御製序不空訳貞元新入目錄海云密厳経三卷不空 大乘密厳経三卷 貞元梵釈 大乘密厳経入密厳微妙身生品一卷 円覚加本」(一一二〇c—一一二一a)とあり、不空訳『密厳経』の名を見ることができるのであって、故に安然是『八家秘録』作成当時には不空訳を見ておられたものと思われるのである。また、特に『八家秘録』に「大乘密厳経入密厳微妙身生品一卷 円覚加本」とあるのは不空訳『密厳経』の中の「入密厳微妙身生品」を指すのであり(日照訳は「妙身生品」)、前述の『菩提心義抄』の不空訳からの引用はこの品の中の文の引用なのであり、このことから明らかに『八家秘録』の頃には安然是不空訳を見ておられたことが分かるのである。故に以上より『密厳経』を通して見るならば『教時義』は『菩提心義抄』より以前に作成された『八家秘録』よりも以前に撰述せられたものと思われるのである。

(大正大学大学院)